

岩手

I W A T E

第2回

第2部

奥州藤原氏が築いた 東北の浄土

考古学から掘り起こす平泉文化の姿



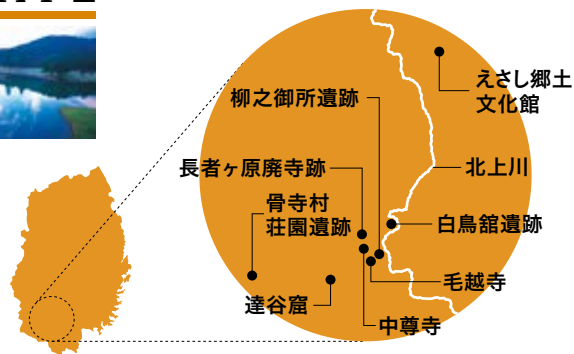
国宝 金銅華鬘(中尊寺蔵)

2018.7.21(SAT) 16:30

I W A T E



毛越寺



平泉 略年表

	1100年ごろ	清衡、江刺郡豊田館から平泉に移る
清衡	長治2(1105)年	清衡、中尊寺一山の造営に着手(寺伝)
	永久5(1117)年	この頃清衡、紺紙金銀字交書一切経写經の業を起こす
	天治元(1124)年	中尊寺金色堂上棟
	大治元(1126)年	「鎮護国家大伽藍一区」落慶供養を執り行う
基衡	大治3(1128)年	清衡死去(73歳)
	大治4(1129)年	清衡没後、相続をめぐり基衡・惟常争う
	保延4(1138)年	基衡、亡父供養のため、法華經千部書写をすすめる。西行、平泉来訪(1144?)
	久安6(1150)年	この頃、毛越寺造営か
	仁平元(1151)年	基衡、関白藤原道頼の五力庄年貢増加命令に難色を示す(2年後に解決) 基衡夫人死去(1152 寺伝)
	久寿2(1155)年	藤原泰衡生まれる
	保元2(1157)年	この頃藤原基衡、死去
	永暦元(1160)年	秀衡の娘(あるいは妹)徳姫、白水阿弥陀堂建立(寺伝)
秀衡	嘉応2(1170)年	秀衡、従五位下、鎮守府將軍に就任(～1176)
	承安4(1174)年	源義経、鞍馬寺を出兵し、平泉に下る(1174頃)
	治承元(1177)年	秀衡夫妻により、高蔵寺阿弥陀堂建立(1177 寺伝)
	治承4(1180)年	源義経、奥州より黄瀬川に至り兄頼朝と対面
	養和元(1181)年	秀衡、従五位上、陸奥守に就任(～1184)
	元暦元(1184)年	秀衡、東大寺大仏再興の減金料として5000両を献納(同じく頼朝1000両献納)。この頃、無量光院を造営か
泰衡	文治2(1186)年	西行、東大寺砂金減金料勸進のため、平泉再訪
	文治3(1187)年	この頃、源義経、平泉に到着 10月、藤原秀衡死去
	文治5(1189)年	閏4月、義経、泰衡に攻められ自害 7月、頼朝、大軍を率いて鎌倉進発 9月、泰衡、贅柵にて討たれる 奥州藤原氏滅ぶ
	建久6(1195)年	頼朝、平泉寺塔の修理を奥州惣奉行葛西清重・伊沢家景の兩人に命ず

出典／『図説 平泉 浄土をめざしたみちのくの都』大矢邦宣(河出書房新社)
※寺伝は寺に伝わる記録。

講師：相原康二氏



昭和18年、旧満州国生まれ、岩手県育ち。東北大学卒。岩手県教育委員会で埋蔵文化財発掘調査・保護行政を担当後、県立図書館、県立博物館などに勤務し、平泉町柳之御所遺跡の保存に尽力。平成21年より、えさし郷土文化館館長。平泉の魅力発信に努めている。



図説 平泉 浄土をめざしたみちのくの都 大矢邦宣(河出書房新社)

世界遺産・平泉を総合的に解き明かした決定版。奥州藤原三代が願ったみちのくの都の姿が、多彩な史料写真からも浮かび上がり、旅心を誘う。



1

中尊寺の鐘の音に込めた鎮魂 藤原清衡、波乱万丈の前半生

平泉は北緯39度にあり、東北のほぼ中央に位置する。奥州藤原氏の初代、清衡はそれを意識してこの地を選んだといわれている。そして、清衡はこの世に浄土を築こうと考えた。それは、中尊寺の建立に際して書かれた「中尊寺建立供養願文」にうかがえる。「鐘の音が地を揺らすたびに、故なく死んでいった霊を、浄土に導いてほしい」という意味の一文が記されているのだ。清衡は数奇な運命に翻弄されながらも、前九年・後三年合戦という戦乱を生き抜き、東北の統治を一任される覇者となった。しかし、彼は武力による統治は望まず、仏教に基づく国づくりにより、誰もが心安らかに暮らせる平和な社会をつくろうとしたのである。彼がなぜ、そのような境地に至ったのか、波乱万丈の前半生を振り返ってみる。



藤原清衡
(毛越寺蔵「藤原三代画像」より)

2

都市論から読み解く 三代にわたる浄土都市の建設

平成23年6月、中尊寺や毛越寺など、寺院や宗教遺跡など5カ所が世界文化遺産に登録された。このとき、リストから漏れた遺跡群がある。近年の発掘成果も併せてそれらを総合すると、中尊寺を中心に機能分化した集落を衛星のように配した「都市平泉」の姿が浮かび上がる。政治の拠点は柳之御所遺跡、通商拠点は七日市場跡、手工業生産と北上川舟運の拠点は白鳥館遺跡、農業拠点は骨寺村莊園遺跡、そして宗教の拠点は達谷窟というように

平泉の農業の拠点であったという骨寺村莊園遺跡。豊かな田園風景が、当時の面影を今に伝えている
(写真提供：一関市教育委員会)



平泉における仏教の
要所であったという
達谷窟毘沙門堂

である。現在、これらの遺産の追加登録が準備されているが、さらに広域的には寺院を中心に形成された、いわば“リトル平泉”のような集落が東北一円に見られる。鎌倉時代の正史『吾妻鏡』に「两国陸奥・羽根に万余の村有り。村毎に伽藍を建て」とあるが、その記述を彷彿とさせる。都市論からも平泉文化が読み解けるのである。

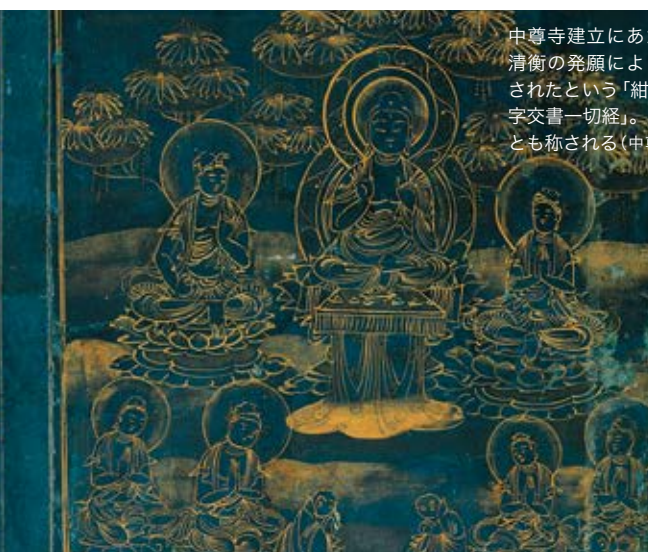
3

大陸とのつながりも示す 出土品が語る幅広い経済活動



遺跡から出土する陶磁器類も、奥州藤原氏の営みを雄弁に物語る。驚くべきはその広域性である。例えば、柳之御所遺跡や志羅山遺跡からは白磁が出土しており、これらは交易・交流が中国まで及んでいたことをうかがわせる。国産陶器も、愛知県の常滑焼や渥美焼、石川県の珠洲焼など、各地の古窯で生産されたものが東北一円から出土している。さらにはそれらをモチーフに、奥州藤原ブランド陶器を試作していたと思われる形跡すらある。また、平泉由来の伝承を持つ仏像も、京都や中部・北陸地方に見られる。金や馬、蝦夷地からもたらされる毛皮なども含め、多様な物品が東北から移出され、藤原氏の平泉文化を支えていたのではないかと。近年の発掘調査からは、そんな経済活動の様相も見えてきている。

柳之御所遺跡から出土した白磁。中国の陶磁器は高級品で、交易の広さだけでなく、平泉の財力も如実に物語っている



中尊寺建立にあたって清衡の発願により書写されたという「紺紙金銀字交書一切経」。清衡經とも称される(中尊寺蔵)

奥州藤原氏が築いた東北の浄土 考古学から掘り起こす平泉文化の姿